

第1回 松本市森林再生検討会議

次 第

日時：令和2年7月20日（月）

18:00～

会場：松本市役所 大会議室

1 開 会

2 市長あいさつ

3 座長あいさつ

4 委員の紹介

5 事務局職員の紹介

——（以下、座長進行）——

6 会議事項

(1) 情報共有

(2) 意見交換

7 今後の日程

8 その他

9 閉 会

第1回松本市森林再生検討会議 議事録要約書

日 時 令和2年7月20日(月)

午後6時00分～9時00分

場 所 松本市役所 大会議室

(臥雲市長あいさつ)

四賀地区の薬剤空中散布は、地元の協議会の皆様や市民アンケート等を通じて、中止、凍結する方針を決定した。

今年度は、守るべき木々に対して、樹幹注入と生活道路に支障がある枯損木の処理等の対応策を実施していく。

委員の皆様には、是非とも専門的な見地からの議論をお願いし、市民にも分かる形で報告をしながら、10年先、20年先を見据えた提言をまとめていただきたい。

松本発の森林再生の新たなモデルが、ここから実現するようお願いをしたい。

(原座長あいさつ)

林業関係の審議委員会等の経験はあるが、今までは事前に事務局が用意した資料に沿って議論をしてきたが、今回は全く進め方が異なり、事前資料等は委員メンバーが用意した議事内容で検討をしていくということが求められている。

松枯れの今の状況は、山に携わる自分たちにとって、市民が山に目を向けてくれるチャンスだと思っている。

これからの松本地域にとって、どんな森林がふさわしいか、現実的な山づくりをどのように進めたらよいか、そんな未来に向けてのビジョンをゴールに設定していきたい。

2点ほど確認します。

当会議は原則非公開であるが、委員協議により内容によっては、2回目以降、公開できる場合は公開としていきたい。

また、議事録については、要約した内容を事前に委員がチェックして公表していく。

(全員了承)

(黒田委員の講義)

資料1のとおり

(オブザーバーの千代課長講義)

資料2のとおり

(原座長)

講義を終えて、委員の中で認識を揃えるため、ご質問や意見等があればお願いしたい。

(香山委員)

伐倒駆除を実施しても、枯れは止まらないので、積極的にマツを利用して、その結果として松枯れが止まればと、樹種転換事業に取り組んでいる。

しかし、現実問題として、どの範囲まで実施すればよいかが難しいところである。

守るべき松林の周囲 3~4 km のマツを全て伐採することは非常に困難である。

現場の判断で出来る部分と政策的に出来ない部分があるが、マツを 1 回無くすことが、その先の守りたい松林を守ることになり、どれ程の効果があるのか伺いたい。

(黒田委員)

標高により被害が出るか出ないかを判断できるのは、微害地だけである。

カミキリは上に飛びにくく、始めのうちは低いところを飛んでいるが、健全マツが無くなってくるとどんどん上に上がっていくので、標高で被害地の線引きすることは難しい。

また、カミキリが飛ぶ距離は、大部分は 2 km くらいである。秋田県では実験的に健全木の 2 km すべてのマツをベルト状に切って、防除を成功したという例もある。

実際に山を扱っている方が、その視点でのゾーニングをすることがよい。

(大澤委員)

山主として話をさせていただく。

四賀地区では、松枯れが始まり、協議会を立ち上げた際には、マツタケをどうするかの 1 点だけだった。その後、マツタケよりも枯れ跡の 2 次災害を心配しだしてきた。

ひと昔は薪ストーブを使用していたため、薪を取りに山へ足を運んでいた。

しかし、今は山に入る方が減少して、荒れ山となっている。

だから、もう少し住民も里山に目を向けてほしいと思う。

(原座長)

枯損木を含めて、現在のマツをどうしていくのか、それによって今後の山づくりの方向性が考えられると思う。そこで現状の把握をするのに何が必要か伺いたい。

(黒田委員)

激害地を早く探すことが大事である。激害地の隣の健全地はまず助からない。場所によって助かる地域ともう無理な地域の線引きはできるかもしれない。

林業者の方のほうが、残せる場所等が直感的に分かるのではないかな。

(香山委員)

素材生産業者の立場からすると、松本エリアで仕事をしたことないのですが、松林業として採算があう箇所は松林として残したい、あるいは残せないのなら事前に伐採利用していきたいという視点で現場を見ている。

(黒田委員)

やはり利用する方が先だと感じた。利用できるものは先に使ってしまう、ただ枯れる前にいかに上手に使うかということが、大変ですね。材として売る部分にもう少し人足が必要ですかね。

(香山委員)

結局、山で薪等を利用していた場所が里山である。

燃料用以外でも、もともと松本地域はマツを使った矢板を製材する製材所がたくさんあった。やはり、薪ストーブで利用するのが使い勝手がいいと思う。

アカマツは本当に燃料として優れている木であり、その基礎技術はできているので、どうやって普及していくかが課題だと思う。

(黒田委員)

どこでもそうだが、製材所等の業者が絶滅危惧寸前である。何かプラスアルファして製材所等と呼んでこなければ、積極的に枯れる前のマツを使うように舵取りができないという印象を受けた。

(小島委員)

アカマツは、バイオマスとしては非常によい燃材である。竜島温泉でもチップに加工して利用している。

森林のエネルギー利用は、10年20年のサイクルじゃなくもっと先のサイクルで考えなければいけない産業である。木材利用がバイオマス利用に繋がっていくということは、この会議の大きな部分であると思う。

(黒田委員)

四賀地区の薬剤散布を一旦ストップして、更に健全のまま松林を続ける、再生させると頑張っても難しいということである。

このまま放っておくと大半に広葉樹が生えてくる。もともと薪炭林の山なのでコナラ、ミズナラなどが生えてくるので、それを使える方向性を考えていくことが良いと思う。

(小島委員)

今回のアカマツ林の松枯れ問題は、日本の林業、特に民有林に対する根本的な問題提起であり、単一樹種の森林は果たして林業として正しい道なのかという疑問もある。

たとえば、ドイツやオーストリアでは、一つの山にいろんな樹種が植えられている。日本人からするとよくマネジメントしたなというくらい多種の大径木もある。

アカマツは、昔は燃材として使っていたし、梁材などの用材としても利用されていたが、今は手が入っていない山となっており、業として成り立たせるのが難しい。

(黒田委員)

ドイツと日本では、緯度が違うので、そもそもドイツに習ったことが失敗だった。
松本地域を含め、日本は地域によって気候が違うことから、ドイツのような混合林はどこでも出来る訳ではない。

民有林はもともと農家の持ち物であり、林業家の持ち物ではない。西日本と松本地域では考え方がかなり違うかもしれない。マツが林業であることが不思議である。

(小島委員)

マツは林業ですよ。

(黒田委員)

林業というものは、やっぱり木材産業として取り扱われることが林業だと思う。

(香山委員)

その辺は、垂直分布や標高、等高線で分けることができないが、実際にこの地域でいうと私がターゲットにしているのは用材生産ができる松林であるかということである。

安曇野市や四賀地区あたりのアカマツは燃料に利用するために天然林でなく人工的に植栽したものが多く見受けられる。今はないが以前は瓦を造る産業が盛んで、その燃料として計画的に植栽されていた。

そもそも生態的な環境として、どんな樹種がどのくらいの蓄積量があるかを把握することが計画を立てていくに必要となってくる。

松本は森林の力、或いは森林の土壌の力があるのか、そこを、私としては知りたい。

(黒田委員)

地域の感覚で違うかもしれないけど、燃料を生産することを林業と呼ぶのか。
西日本の方では、それを林業とは呼ばない。

(香山委員)

定義の問題だと思う。林業かどうかはとにかく、いわゆる自家燃料を農用林としての里山とちょっと違う利用方法もこの地域にはあったと思う。

(黒田委員)

それを林業振興と言ってしまえば、どこまでを林業と考えるか一人ひとり違うので、その話のときは、細かく分けた方がいいのかもしれない。

(大澤委員)

アカマツは林業ではないと考えている。林業はスギやヒノキのような建材として使用できるものが林業だと思う。アカマツは建築全体として今はあまり使用できない。

昔、地元では3つの製材所があった。いろんな用途にマツが使用されていた。今はもう無い。それと同時に山も荒れてきた。マツを残すならば、林業という中に組み込まれていく方策を考えた方が良い。

(原座長)

利用していくという方向性が一つ見えてきた。
松本エリアにどんな森林がどこにあるのか、またアカマツが枯れた後にどんな経過をたどっていくのかの推移が重要であると思う。

(井田委員)

先日、四賀地区の被害状況を確認してきた。
私が大学在学時に広島で見た被害の方が、松本地域の被害より、もっと酷いものだった。
松本地域の被害林分では下層木が生えてきているため、放っておいても森林が戻るだろうという印象である。
今後、この地域の森林がどのくらいの年月で再生するのか、それには立地によってどのような種類の植生が優占してくるかによって変わると思う。
現在、ニセアカシアが生えてきていることが気になっているが、ニセアカシアの材自体は有用樹種であって、外来種であるもの炭として利用できる。
シカが下層木を食害することも懸念されるため、シカ柵等を検討していく必要がある。
様々な観点で森林をみて行かないといけないと思う。予算はともかくとして、個人的にもしっかりと調査をしていきたいと思っている。

(原座長)

調査の方針や考え方等、どの程度のことを考えればよいのか。

(井田委員)

まずは、マツ枯れが進行している場所や、これから被害地になる可能性のある健全箇所、また比較できるような地点を設けて、植生調査やモニタリング調査をしていきたい。
一番シンプルな調査であれば、すぐに出来ると思う。

(原座長)

そのような予算はすぐに組めるものなのか。

(臥雲市長)

松本にはどんな森林がどこにあるのか把握することが、対策の大前提であると思う。
皆さんのいう調査が全国的に例としてあるのか、いままでない手法なのか規模はどうなのか調整をしたいと思うが、今回の中長期的な対策の判断材料であることは認識している。
必要であれば、予算化していく。

(戸田委員)

森林資源の基礎データは森林簿であるが、森林簿は、実際のアカマツの分布と比較するとかなり違うところもある。

県では、森林簿データからではなくて、治山担当がレーザー測量と航空写真から分析したデータを持っている。そのため比較的、資源量等は正しい。

航空写真で見るとスギ・ヒノキは、頭が尖っているので本数が分かりやすいが、アカマツは平らで枝が張っていることから本数はカウントしにくい。

標高や傾斜、地質や植生等を踏まえた情報を面的に集めたうえ、松本市は、どこで林業を行うか、どこを里山として保存、樹種転換していくか、資料を基に地元で意思決定していただく、そのプロセスが大事になってくると思う。

(原座長)

その情報の収集の手法はどうしますか。

(黒田委員)

アカマツ林が枯れたらどうなるかという情報はあがるが、松林をどうしていくかという観点からの研究の取り組みは聞いたことがない。枯れるまで待つか、薬を撒くかの対策しか考えてきていないので、その後のことを見ていない。

(井田委員)

10 年程前に松本地域にも松枯れがくると思い、それを見越して調査地を作ろうと周辺市町村担当者の方々と話をしたが、私有地が多く、所有者も分からず森林に立ち入ることが困難で断念した経過がある。

今回、しっかり入れる調査地があれば研究者としてありがたい。

(黒田委員)

そういうこともあって、現実的な植生調査ができないんじゃないかと感じる。

(井田委員)

1980～90 年代にいくらか調査は行われていたが、その後の経緯をしっかりと把握した論文はない。

(黒田委員)

今回行おうとすると、10m のプロットの基本的な植生調査は必要である。ただし、森林全体像を掴むには面倒な作業になる。しかし、どこかでは実施しなければいけない。

どこまでの精度が必要か、生態学の観点から検討する必要がある。

(井田委員)

現場自体は距離的にも近いので、そんなに労力的なものはいらない。

(黒田委員)

条件の違うところをどれくらい選べばいいのか。

(井田委員)

選定数等は時間をみながら実施していく。基本的な方法で松枯れが進行している箇所も含めて、しっかり地域に還元できるような調査内容にしたい。

(原座長)

話をしていた調査は、今後の山づくりをどうしていくのか必要となる重要な指標である。一方で、林業の観点から我々の林業事業体は、国の制度に従って経営計画を策定して木材生産をしており、その際、我々も森林内に調査に入るので、それを活かし、より現実的なものになればよい。

(香山委員)

今ここで目指しているのは資料ではなく、一定の期間で一定の成果を出して市民に見せて、何ができるかの選択は地域の住民が決める、といったストーリーでないといけない。

松本では、田中県知事のときに大仏ダム建設を中止した際、薄川の上流域の流出量等の調査を行った。非常に分かりやすい調査だったが、予算の関係上、途中で頓挫してしまった。

松本市の森林再生については、ターゲットとなるものを出し合っていく必要がある。やはり、住民が自分たちの直接かかわる里山に何ができるか、選択肢を与えられるようにしたい。

(大澤委員)

四賀地区の守るべき松林に協議会として薬剤散布をお願いしたが、その後はどうするか話題にもならなかった。

次世代の子供たちのために、山林や里山、山の恵の教育をする場をつくり、四賀地区だけの守るべき山ではなく、松本市全体の市民の憩いの場として利用できるような策を出していただきたいと思う。

(原座長)

森林簿が資源データの元になるが、林地台帳を各市町村で整備したはずだが、その辺を絡めた森林調査のアイデアが何かあるか。

(小島委員)

森林の問題として重要なのは、個人有林の森林をどうするかということ。

放置されているから今回の問題も出てきており、所有者確認をするために林野庁が林地台帳の整備を推進してきた。

今は相続等でも自分の山が何処にあるか分からないのが現状である。
林地台帳を松枯れ対策に使い、自分の山が確認できるようなシステム構築していかないと個人山は手が入らない。

みんなが山に入っていけるようなモチベーションにならないと、新しいビジョンを出せる、モデルを出せるとこまでいかないような気がする。

(原座長)

何となくの方向性とやるべきこと、課題等が出てきた。
そういうことを検討しながら、当会議は回数的に5回くらい予定したいと思う。
今日は、ブレストしたくらいの感じで、2回目までに少し整理をしながら今後どのように舵を取っていくか考えてきたいと思う。

(戸田委員)

山の木を伐採するにあたり、林道や作業道等の道を開けると思うが、今後の会議では防災の観点からの議題も盛り込んでいただきたい。

(原座長)

市民の方の一番の心配はそこにあると思う。この内容も含めて話をしていきたい。

(臥雲市長)

今日の委員の方のお話を聞きながら、必ず何らかの価値のあるメッセージを、方法論をまとめたいただけるのではないかと、打ち出してくれるのではないかと感じた。

コロナの問題や自然災害の問題が私たちに振りかかっている2020年という今だからこそ、この問題に取り組む意味が大きいと感じている。

以 上